

天文
同好會

觀 測 部 月 報

觀測部流星課觀測報告

課長 小 槇 孝 二 郎

十二月中觀測を報告された方は下記の通りである。

觀 測 者	(略符)	觀 測 地	觀測時間數	觀測個數
小 槇 孝 二 郎	(Ko)	和歌山縣有田郡金屋	180 ^m	51
中 鐵 馬	(Ta)	福岡市外箱崎町中小路	80	13
原 田 參 太郎	(Ha)	大分市大分橋通三丁目	285	35
佐 藤 義 雄	(Sa)	福島縣石城郡川前	—	2
村 地 孝 一	(Mu)	名古屋市第八高等學校	—	1
小 林 篤 郎	(KB)	京都市北白川道分町	—	1

1. 以上の人々によつて觀測されたる0等以上の流星を集録すれば

日	時 刻	觀測者	確 度	繼 續 時 間	光 度	速サ	色	其他	出 現 點		消 滅 點		流 星 群
									α	δ	α	δ	
7	20 ^h 35 ^m	(Mu)	4	0.8 ^s	0	S	WY	痕	84°	+27°	73°	+16.°5	
10	0 55	(Ha)	4	0.2	Mars×2	M	R	痕	123	+20	135°	+29°	
ク	1 40	(Ha)	4	0.2	Mars×2	rR	B	痕	125	+54	138	+41	
ク	22 6	(Ko)	3	—	0	R	W	痕	118	+28	108	+37	
ク	23 16	(Ko)	3	1.2	-1	VS	BW	痕	149	+47	151.5	+27.5	
11	0 26	(Ha)	4	0.3	Mars×2	VS	B		101	+34	95	+34	双 子 群
ク	0 34	(Ha)	4	0.4	Mars×3	VS	B		151	+ 8	159	+6	オ リ オン 群 ?
14	3 28	(Ko)	—	0.7	-1	rS	W	痕	75	+61			
ク	ク 51	(Ko)	3	0.5	0	M	W	痕	170	+72	240	+60	双 子 群

2. 双子座流星群觀測概況

引つゞく天氣惡の爲、繼續的觀測は出来なかつたが、原田、田中二氏及筆者により次の如く觀測が行はれた。

日	觀 測 時 間	觀 測 者	觀 測 數	双子日群	同左一時 間 平 均
10	0 ^h 30 ^m → 2 ^h 35 ^m	(Ha)	19	8	3.84
ク	22 58 → 23 18	(Ko)	8	1	1.50
10—11	23 30 → 0 30	(Ta)	12	8	8.00
ク	23 0 → 1 40	(Ha)	16	3	1.13
14	3 0 → 4 20	(Ko)	33	16	12.00
ク	20 50 → 21 50	(Ko)	8	3	3.00

11日、12日、13日、の觀測なき爲極大を決定し得ない。出現の状態については相當豊富であつて、0等以上双子座のもの、三、四個觀測されてゐる。但し最も

多く見られたのは2等乃至5等のものである。

3. 観測より得たる輻射點

観測より五個の輻射點を得た。Meteoric-Apex には(流星頂點)とも譯すべきか) 其時刻に於ける地球運行の方向である。

	時刻(萬國時)	Meteoric-Apex	輻射點		流星群	個數	観測者
			R.A.	Decl.			
A	12月 9.7日	167.8°	109	+33°	Geminids	8	(Ha)
B	〃 10.6	168.7°	112	+29.5		8	(Ta)
C	〃 13.8	171.6°	113	+31		12	(Ko)
D	〃 10.6	168.7°	86	+14	Orionids	5	(Ha)
E	〃 13.8	171.9	152	+22	γ -Leonids	6	(Ko)

以上の五個の輻射點より拋物線軌道を計算して見たが、こゝには發表を避けて原田氏観測のオリオン群(Orionid)の軌道のみを掲げて置く。

$$\omega=66.9 \quad \Omega=78.4 \quad i=167.9 \quad q=0.380$$

4. 原田、田中二氏による同一流星の同時観測

福岡に於ける田中氏と、大分に於ける原田氏の十一日夜半に観測せる流星中同一流星が一個だけあつた。これは甚だ貴重な材料で流星研究上重要な價値をもつてゐる。観測をそのまま別記すれば

時	刻	観測者	確度	繼續時間		光度	速サ	色	其他	出現點		消滅點	
				δ	α					δ	α		
11日	0h 27m	(Ta)	5	0.1s	1	R	W	—	130	+11	137	+2	
〃	0 26	(Ha)	4	0.3	Mars \times 2	VS	B	—	101	+34	9	+34	

光度、繼續時間數に可成りの相異があるが、これは疑なく同一流星であつて筆者はこれより下記の如く計算によつて高度等を得た。

結 果

出現點の位置は愛媛縣佐田岬の南方 6km の海上 ($\lambda=132^\circ 1.0$ $\phi=33^\circ 17.0$) で 131.5km (± 0.4 km) の上空で發光し殆んど眞西の方向に飛び大分市の東方 16 km ($\lambda=131^\circ 49.9$ $\phi=33^\circ 15.5$)の地點の上空 74.2km (± 0.4 km) で消滅した事となつてゐる。経路の全長は 61.0km である。双子群の秒速は從來の平均では約 40km であるので、この結果より速度を求めたものには甚だしい相異がある観測者の繼續時間の観測が早きに過ぐる様に思はれる。(1.20)

變光星觀測報告 (4)

變光星課幹事 小山秋雄

鹿兒島の中原氏が今後觀測を續いて寄越される事になつた。有力な器械の所有者の發奮を望む。本月分の觀測は少なかつたが、來月號にはセフェウスのδ, アルゴルの觀測を整理して載せる。

觀測者	觀測地	器械
今津 績	淡路	ガリレオ式双眼鏡(4×)
龜井 壽彦	臼杵町	肉眼
北谷 巖	洲本町	5センチ屈折(25×)
小山 秋雄	京大天文臺	18糎屈折, 13糎反射, ガリレオ式双眼鏡
中原 靜彦	鹿兒島七高	ツアイス13.5糎屈折(71×)
細谷 治雄	東京市	肉眼

月 日 時刻	光度	備考	觀測者	月 日 時刻	光度	備考	觀測者
021405 くじら の 。 (Cet.)				1 4 19	4.0		龜井
1928年				9 20	4.0		ク
12 30 21	7.3	25ミリアインダ-	中原	14 19	4.0	月ハ雲ノ背後	ク
1929年				30 19	4.0		ク
1 7 20	7.3	ク	ク	30 22	4.1		細谷
30 22	9.0		北谷	31 22	4.1		ク
2 1 22	9.0		ク	31 22	4.1		今津
3 19	9.1		ク	2 1 20	4.0		ク
7 20	9.2		ク	2 21	4.1		ク
9 21	9.2		ク	2 24	4.0		細谷
10 21	9.2		ク	3 22	4.0		ク
13 20	9.3	月	ク	3 20	4.0		今津
045443 きよしや の 。 (Aur.)				4 22	4.0		今津
1928年				6 23	3.8	薄雲	龜井
11 9 23	4.2	肉眼	中原	7 22	4.0		細谷
11 20	4.1	ク	ク	7 20	4.1		今津
19 20	4.0	ク	ク	8 20	4.1		ク
12 4 19	3.9		龜井	8 23	4.0		細谷
7 20	3.8		ク	8 20	4.0		龜井
			ク	9 20	4.1		今津
14 19	3.7		ク	2 10 19	4.1		今津
17 19	4.0		ク	12 20	4.0		龜井
1929年				12 21	3.8	双眼鏡	小山
				13 24	4.1		細谷

月	日	時刻	光度	備考	観測者	月	日	時刻	光度	備考	観測者
	14	23	4.1		細谷	1929年					
	15	23	4.1		ク	1	6	19	10.0		小山
	15	24	4.0		龜井		7	19	10.0		ク
	15	19	4.1		今津		13	22	10.2		ク
	16	19	4.1		ク	2	12	20	9.7	18センチ	ク
	17	20	4.1		ク		13	20	9.5	ク	ク
060547 ぎよしや の SS (Aur.)						此の観測より1928年8月末, 12月初めの極大(9.4等), 1928年10月下旬及び1929年2月初の極小(10.6等内外)が定められる. 1927年に発見せられた新しい星. 週期90日あまり.					
1929年						213843 はくてう の SS (Cyg.)					
	2	12	19	<13.9	18糎	11	9	22	11.8		中原
	13	20	<13.9	ク	ク		20	22	11.8		ク
062047 ぎよしや の AG (Aur.)						1928年					
1928年						1929年					
	8	10	3	9.7	月アリ	11	30	19	11.9		ク
		11	3	9.6	空明レイ	1929年					
		12	3	9.9	地平線近イ	1	9	19	11.7		ク
		13	3	10.1	不正確	此の星は1907年より1909年にかけて不規則な變化をしたが, その變化に最近SS Aur. が似た變光をやつてゐるので注目されてゐる.					
		14	3	9.7	ク	234757 カシオペヤ の p (Cas.)					
		15	3	9.8	観測シニクイ	1929年					
		22	3	9.7	ク	1	31	22	4.9		今津
		23	4	9.7	地平線近イ	2	1	20	4.9		ク
	9	10	2	9.5	ク		2	20	4.9		ク
		14	2	9.7	ク		3	20	5.0		ク
	10	11	1	10.6	ク		7	19	5.0		ク
		13	2	10.4	ク		8	20	5.0		ク
		16	3	10.6	ク		9	20	4.9		ク
	11	9	23	10.1	ク		10	19	4.9		ク
		10	22	10.1	ク		12	19	4.7		小山
		11	21	9.9	ク		14	22	4.9		今津
		12	21	10.0	ク		15	19	4.9	月アリ	ク
		17	21	10.0	ク		16	20	4.9	月アリ	ク
		21	0	9.8	ク						
		26	5	9.3	18センチ						
		30	20	9.6	ク						
	12	16	20	9.7	ク						
		30	20	10.0	ク						

太陽課二月報告

太陽課幹事 柴田 淑次

今年の京都は實に天氣が悪い。元來、京都は山國であつて。大平洋、日本海共に十餘里もかなたにあるのだから、概して大陸性氣候を呈する。冬

は寒く夏は暑いのであるが、其割に冬は天氣がよい。寒氣凜烈として、肌を、つんざくも云ふ程でもないが、寒夜の蒼窮に銀漢の凍り付いてゐるのを見るに、ロシアはシベリアの北端をさまよひ歩いてゐるかの様な氣がする。

所で今年是非常な的外れで、毎日狂ひじみた天氣ばかりが續いて、世間では數十年來の旱天だに騒いでゐても、此方では、幾年振りの曇天續きだ。雨が降る様で降らず、天氣になる様でならない。従つて、稀に、晴れても、氣流状態は、極めて悪く、全々寫眞撮影に適しない。私は幾度か寫眞装置をしたけれども、餘り激しい惡氣流に如何にも出来なかつた。其れ故、此頃は寫眞撮影は非常に困難であつて、撮影される日も亦極めて少ない。

去る一月中旬出現した一大黒點は其後二月上旬再び東縁に現はれた——云ひたいが、實は、奇妙な事には、あの偉大なる黒點も全く其影を没してしまつたのである。實に世は無情であつて、祇園精舎の鏡の音も太陽にも響くかまうか保證出来んが、世にも憐れも云ふべきだ。所が其の英雄の面影を幾分なりとも、追憶せんとしてか、丁度其隣りの經度 30° 程東に離れた所に、二つの反る黒點が出現して居た。緯度は、北へ、二三度上つた所である。こう云ふ現象は、時たまある事であつて、丁度人の世の戰國時

代のその様に、一人の英雄が他の英雄に伐つて代る有様に似て居る。今度の黒點も、此處に堂々掲載したいのだが、先月號も云ひ先々月も云ひ餘り堂々たる出来なえでもなかつたので、今度は遠慮してをく。今後も云つても、天界は、口繪ならともかく、普通の星の寫眞には、餘程骨が折れるから、暇な時に外、掲載しない。その代り、挿繪を入れる考へである。

二月は總じて、南半球が活動した。それも、十日前後に甚しい、北半球は、十日すぎ、全く平穩状態に落入つてゐる。前に此頃は、太

撮影時間	撮影者
6日 9時 48分	Sibata
6 9 50	〃
8 10 7	〃
8 10 8	〃
12 9 58	〃
12 9 59	〃
14 9 42	〃
14 9 43	〃
16 8 35	〃
16 8 43	〃
27 9 45	Mutakami
27 9 47	〃

陽黒點活動帯は、毎月二十日頃にあると云つたが、二月は例外であつて、反つて二十日頃は沈滞期であつた。

二月のプロミネンスは、小さいながらも、數多くあるこの事、やつぱり寫眞撮影さむじく天氣の悪いため觀測の出来る日は非常に少ないらしい。

此間、寫眞現像室が水浸りになつて、私が太陽寫眞を水洗して翌日迄、そのまゝにしてをいた所、夜の間に、流しの水氣が防がつて、寫眞室一面に膝を没する洪水になつてた。此の水を全部かい出すのに、いらぬ時間を費して、大損害を蒙つた。

太陽課の此の欄は、月々の觀測報告を主とするが、此れからは、其他に來るべき月々の豫報をも少しづつ載せる事にする。毎月天象欄の太陽の所の P_0 B_0 L_0 の隠も、話の都合でこゝに移しかへるかもしれん。其他、直接に太陽に關する事でなくても、關接にでも太陽に關する事なら遠慮なく載せる。〔以上〕

鹿島丸にて

謹啓 出發の際は態々御見送被下恐縮仕候。尙澤山の紹介狀を被賜大いに心強く存居候。難有御禮申上候。立海灘に出た近所、上海より揚子江河口に出た附近及び香港から出た近所がやゝ荒れ申し候も其他は至極平穩なる海にて毎日楽しく航海を續け居り候間御安心被下度候。香港を出で、五日明日は早朝シンガポールに着く由にて御座候。三ヶ月ばかりの後は京都天文臺の人々が丁度このあたりを航海せられる事を想ひて感無量なるもの有之候。香港とシンガポールの間の中三日間全く何者も見えず候。昨夜は心ゆくまでに大空の星さしたしみ申候。金星、木星、火星をつらね、赤道は頭上に近く御座候。デッキに立ちて星をながめ居り候處。カリフォルニアの眼科醫なる米人來りて色々質問いたし候間大いに氣焔を上げて、太陽系の話やら、木星や火星の話や、銀河系の構造や、シリウスを指してそれ迄の距離なきを説明申し候。丁度夕食の食卓でビールをひっかけ居たる爲め、平素うち氣なる小生も大膽なるブローリクングイツシュを連發し候も大體言はんご欲する所は通じたる如く候。船中日本人は極く少く候。

今朝未明に水夫が一人あやまつて海中に落ち大そうごうをいたし候。幸に海が平穩なりし爲めついに見出しボートを下して助けあげ候も、その爲朝一時間あまり大海の眞中にごまり候。

時節柄御自愛專一を祈上け候。天文臺の諸君によろしく御鶴聲被下度候

昭和四年一月三十日 於南支那海 荒木俊馬
山本一清先生 御侍史